



田植え時期の作業と雑草防除の注意点

秋田地区営農センター 主任 佐藤 怜太

● 田植え時期の作業のポイント

① 耕起・代かき作業

機械が大型化し作業スピードが速くなると、浅く表面をかき回すような代かきになりがちです。浅耕しは土中の酸素不足の要因となり、根の伸長を阻害します。耕深を維持し、丁寧な作業を心がけましょう。

② 田植え作業

栽植密度は70株/坪、植込本数は5~6本(約400本/坪)を目標とし、主茎主体の稲作りを目指しましょう。また、田植日は平均気温14℃以上の好天が続く日を行うのが最良です。低温で風が強いと白枯れ症状、逆に最高気温が20℃を超える日は苗の老化や除草剤の薬害が起りやすくなるので注意しましょう。



③ 田植え後の管理

活着後~分けつ期は浅水管理で水温・地温を高め、分けつを促し、初期分けつの確保に努めましょう。

● 水田雑草の防除について

① ノビエ

現在流通している一発剤の多くはノビエ2.5~3葉までの登録となっていますが、効果の安定のためには2葉までの使用が望まれます。ノビエの発生は代かき後よりスタートし、約一週間で1葉のペースで成長していきます。2葉までに間に合わせるためには散布は代かき後10日以内となります。

中後期の専用剤ではクリンチャー粒剤は移植後7日からの使用で4葉期までの登録となっていますが、残効性はありません(今発生しているノビエのみ効果)。ヒエクリーン粒剤は移植後15日からの使用で4葉期の登録、殺草までに日数を要しますが二週間ほどの残効があります(散布後の発生抑制)。発生の状況に応じて使い分けてください。

② ホタルイ

前年度発生した圃場では種子、または株基部ごと越冬し、次年度の発生源となります。本田での発生はノビエよりやや遅くなりますが、圃場によっては同程度の早さの場合もあります。初期の草体は葉齢の見分けがつきにくく、前年多発した圃場などでは比較的効果の高いプロモブチドの入った一発剤の使用または初期剤との体系処理をお勧めします。

プロモブチドの入った除草剤

初期剤

ショキニーフロアブル



一発剤

バッチリ1キロ粒剤、フロアブル、ジャンボ
アップレZ1キロ粒剤、フロアブル、ジャンボ

